

郷土室だより

第 12 号

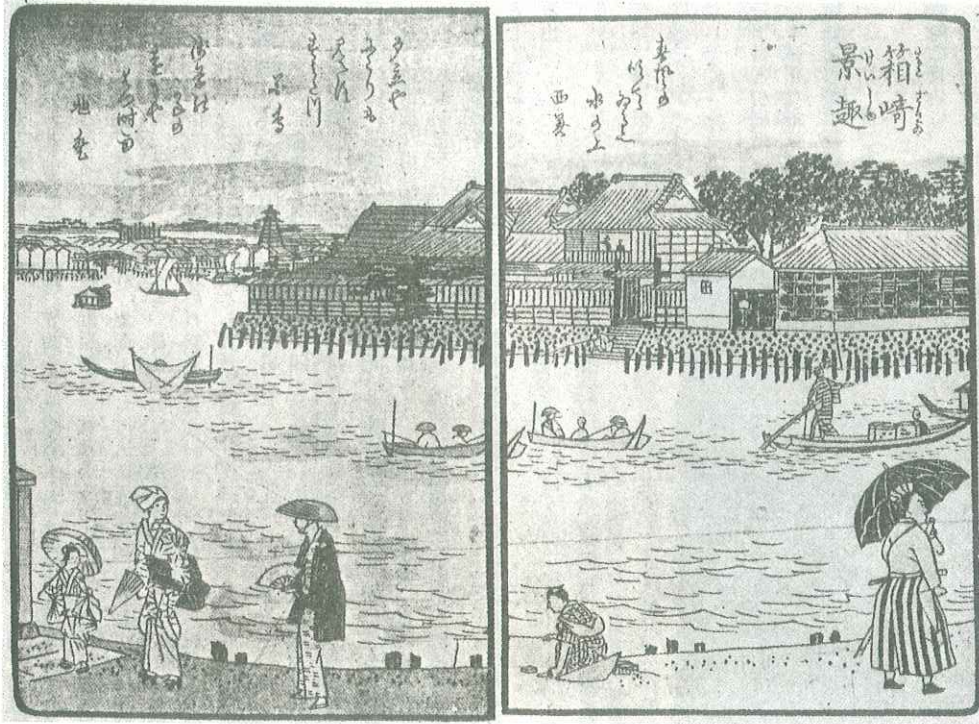
昭和51年 2月15日

編集・発行

東京都中央区立 京橋図書館

東京都中央区築地 1-1-1

電話 543-9025



箱崎の景趣

(東京繁華一覽)

中央区名物旬集 四

安藤 菊 二 輯

橘 町

橘町にしろ人ありて、とし忘れに
まかりぬ。過行かたの事どもとり
いだして

笑ふより泣を過すなとしわすれ 略 通

(俳諧船遊戯)

芭蕉翁一年冬籠りありし橘町の

近くに居を移して

袖の香の義にもゆかし煤払

蓼 太
(句集)

野遊や橘町の手代ども

畔 川

橘町は、横山町一丁目の南続きの町で、若松町、
村松町、久松町などに囲まれて三丁あった。明暦の
大火(一六五七)以前、西本願寺別院がまだ浜町に
あった頃、門前町として立花を売る家が多くあった
ので、たちはな町をもって町名としたといわれる。

この町は、元禄の頃には静かな住宅地となってい
たらしい。元禄二年版『江戸図鑑』に「浮世絵師、
菱川吉兵衛(橘町、師宣)、同吉右衛門師房(同町)
古山太郎兵衛師重(長谷川町)」などと見える。芭
蕉がこの町に仮偶したのも、ほぼ同時代、元禄五年
芭蕉四九才のことであった。「芭蕉庵小文庫」や、

之芳の『蕉翁文集』に収められた「栖霞之弁」に、「こゝかしこうかれありき、橘町といふところに冬ごもりして、睦月ささらぎとなりぬ」とあり、阿部正美氏の『芭蕉伝記考説』に、この記を、元禄五年二月の執筆と考定している。

あらめ橋

あらめ橋かゝる所や紅葉鮒

宗因

(俳諧当世男)

「あらめ橋は、日本橋川から伊勢町堀に入る口の所に架されていた橋。『江戸砂子』に「又六助橋と云、大船町より小船町へわたる。」「再校江戸砂子」には橋詰にてあらめ、わかめ等の海藻を売るゆへの名也。」「新編江戸志」に「江府のあらめ多く是より出る。その外、海草軒とひとしく積おき商ふ也。夏はとこてん多く是より出る也。」と記してある。」
(廣見安二郎氏「日本橋」)

(てれふれ町)

むら時雨てれふれ町の名なるべし

芭蕉 (二葉舟)

照降町は、もとの小網町三丁目と小網町一丁目の間、荒布橋から親父橋にいたる通りの名で、家数にしたら何軒もなかったが、雪踏屋と下駄屋が軒を並べていたので、ユーモアたっぷり、呼びならした町名であった。

元禄の頃、ここ、てれふれ町の裏店に、若かりし日の其角が借家住いをしていたことがあって、二代目市川團十郎(柏庭)が、随筆『老のたのしみ』にこんな話を書いている。

「……其頃翁(。芭蕉翁を指す)は四十前後の人歟、笠翁子も嵐雪居士も、どうくにて、てれふれ町足駄屋の裏、其角翁の所に、出居衆に笠翁は居られ、嵐雪もかゝり人にて三人居られ候よし。嵐雪なども、俳情の外は、翁をはづし逃などいたし候由。殊の外気がつまりおもしろからぬゆへ也。(中略)其ころ其角嵐雪は、夜具もなき、どうらくなるくらしのよし……」

芭蕉が四十前後といえは天和年中か貞享の初年のことだ。夜具もないような、貧乏ぐらしの其角の借家に、嵐雪や笠翁がころがりこんで、どんな生活をしていたのやら。貞享の昔、俳諧一本で世を渡るということが、どんなに容易ならぬことだったかが察せられもする。

人形町

人込を歌舞伎役者や夏の月

莊丹

(能筆集)

茶運び人形(「太陽」75年6月号から)



人形町にて

人形に茶を運ばせてすゞみかな 一茶

一茶が言うところの人形は、人形町で鹿子餅を売っていた、役者上りの嵐音八の店で使っていた、からくり仕掛の「茶くみ人形」のことで、当時なかなか評判のものであった。「寛天見聞記」に「寛政の末まで、此所(人形町)に、あらし音八と云役者の家にて、鹿子餅を売ける店先に、四尺ばかりの坊主小僧の人形、袖なし羽織を着し、茶台の上へ竹の皮包を持つたるを立置たり。餅買人の来る時、此人形おのれと持出る、ぜんまいからくり有し也」と記してある。

二・三年前、北里大学教授立川昭二氏が「科学朝日」(一九六九・六月号)に「茶くみ人形の機巧」という一文を寄せられ、江戸時代製作の機巧人形は今も十個ほど残っていることを教えられ、更に、寛政八年版の『機巧図彙』の図解に従って、早大の学生某君が、組立てた人形も、図彙の図解どおりに運動をすることが確かめられたと記しておられた。百八十年近くも前に、人形町の餅菓子屋の店先に、こうした人形が登場してくるのもおもしろい。

田所町駄菓子

はな紙につゝむ鯛あり四日雛

連理 (馬子)

「田所町は長谷川町附近にあり、昔は雛菓子を売る者もあったらしいが、他に文献を見ない。」(木村氏、註解)

(富沢町)

ぬいで干す富沢町や更衣 許六
露の身か富沢町の暖簾出る 長水

富沢町古着

おぼつか暖簾下せば闇の梅 雪平

富沢町は江戸開府後間もない頃、盗賊の頭目富沢某が、官許を得て古着屋を開いて以来、古着屋の街で通っていた。石川雅望の『都のてぶり』にこの町の古着市の容子がつぶさに書かれていることも、知る人は知る。富沢町の古着は、船で遠く道の奥の果まで送られていたというから、たいしたものだ。

(新大橋)

元禄五申年の冬、深川大橋なかば
かゝりけるとき

初雪やかかけかゝりたるはしのうへ

芭蕉

同じく橋成就せし時

ありがたやいただひて踏はしのしも
同 (風羅袖日記)

大橋の下の螢や飛螢 文一 (蕉尾琴)

大橋や火燧はなれて二心 江菫 (同)

新大橋

遠過るほど見て行柳かな 昌可

朝霧や帆ばしただけの遠けしき里亭

しぐるゝやまたかき出すふねの垢 蜂巣 (『東京繁華一覽』)

新大橋は両国橋より川下の方、浜町から深川六間堀へ渡る橋。長さ百八間。永代橋に次ぐ長橋であった。元禄六年の創架であることは芭蕉の句がこれを証している。

「新大橋を題材にした錦画に、一勇斎国芳の「東都富士三十六景」の内「新大はし橋下の眺望」や、小林清親の「東京新大橋雨中図」などがあるが、広重の「名所江戸百景」中の「大はしあたけの夕立」は最も知られている。」(吉田暎三氏『浮世絵辞典』)

(三又)

三俣は月見の舟のいかりかな (江戸名所記)

三俣は月ともとえや波の文 (同)

さあ御座れ月も三つまた船遊び (江戸雀)

見渡せば霊岸島の霧晴て 雪柴

三俣をゆくふねをしぞ思ふ 志斗 (歌林十百題)

江戸にみける頃、海上の月を見んとて、吉隆嶺などをいざなひ、船の中にて一句づゝ作りけるに

月は一ツ影はみつまたのながれ哉 立圃 (空塵)

三ツ足はみつまた月のかへる哉 一雪 (洗濯物)

深夜浜三又口

流れ行高尾が顔敷水の月 蓼太 (句集)

三又江拳銀鱸

いざ月に顔かぞへむ活けすゝき抱一 (扇籠之夜)

月と風とすゞし三又川一丸 調布 (玉油雜纂)

集めとるや三又の瀬に四手あみ 調布 (同)

三又釣舟といふ八景の題にて

すゞ風や三筋にわけて釣の舟 也有 (鑷つか)

水やそら空や三又天の川 旨原

三又口

流れ出る缺け盃や秋の水 嵐亭

三つ又や江戸の硯の洗ひ隈 沾竹 (千鳥掛)

三つ又や衝は残る波の声 而行 (句體別)

「三派、新大橋の下、分流の所を云。浅草川と、箱崎の間の流との分れ流るゝ所なればなり。(此所を別れの洲と云は、汐と水のわかれ流るゝ所故にいふ。)此所は、月の名所なり。一昔は多く遊女歌舞妓の類ひ、こゝに船をうかべて宴を催し、殊更月の

夕は清光の限なきを遊び、酒に對して哥諷ひなんと
甚賑しかりしとなり。」(江戸名所図会)

中 洲

夏の夜の中洲に聞はなかりけり 春 朝

これは「中洲」の繁栄を吟じた句である。土地繁
昌のわりに、句のすくないのは淋しい。

「中洲」は、御伝馬役馬込勘解由が、伝馬助成地
として出願し、明和八年(一七七二)八月、築立を
完成した土地で、面積は九千坪。町名を「三俣富永
町」といった。

地固めをするために許した水茶屋、豆蔵から発展
して、湯屋三軒、茶屋九十三軒というほどの観樂場
となった。名にし負う月の名所納涼地であったから
夏日の賑いはたいそうなものであったが、あまり調
子に乗って隠し売女を置いたことから、執政松平越
中守の嫌悪するところとなり、寛政元年(一七八九
)隅田川の大川浚に便乗して、せつかくの新地を取
払い、元の寄洲にしてしまった。中洲の繁栄したの
は僅々十四年間にすぎなかった。

箱崎の景趣

春風の吹てゐる也水の上

西 暑

夕立やにぎりも見えずすみだ川 花 鳥

浅草のかねの遠さやはつ時雨

旭 登
(東京繁華一覽)

永代橋あらたにこのはしを渡るに、

景色めでたく富士筑波も見得たり

この橋をかけた大工よけふの月涼 菟

(皮籠摺)

永代橋

遊山火や蘆の葉わけや魂迎

其 角
(五元集)

永代のしら魚

白魚の照し足らぬや夜の橋

風 響
(鹿子)

永代橋のもとに銀鱸をあぐるとき

さし覗く顔も鷗や五兵衛舟

抱 一
(屠龍之技)

永代の沖にや雨の幟竿

哲阿弥
(句集)

永代橋

秋ふるや住吉の岸の橋柱

蓼 太
(隅田川西岸行)

永代橋眺望

元日やよどまぬ水の帆懸船

存 義
(古米庵発句集)

題永代橋

深川へわたせるはしや春の霜

存 義
(同上)

「永代橋」、箱崎より深川佐賀町に架る。元禄十
一年戊寅始て是を築せしめらる。長凡百十間余あ
り。此所は諸国への廻船輻湊の要津たる故に、橋上
至て高し。」(江戸名所図会)

催し物のお知らせ

◇ 東京を語る会 第17回

日時 昭和五十一年二月二十一日(土曜日)

午後二時~四時

演題 「水路部百年」―築地懐古―

講師 日本水路協会調査役
東海 大学 講師

中 西 良 夫 氏

・ 受贈図書

・ 中村芝鶴氏(歌舞伎俳優)から出勤記録が、寄
贈されました。

(大正十一年~昭和十九年の総番附、プログ
ラム他)

・ 国立劇場 芸能調査室編

歌舞伎の文獻

2 御狂言楽屋本説

3 劇場訓蒙図彙

4 羽勘三台図絵

5 劇場楽屋図会

6 狂言作者資料集 (一)

閲覧は、郷土室でできます。